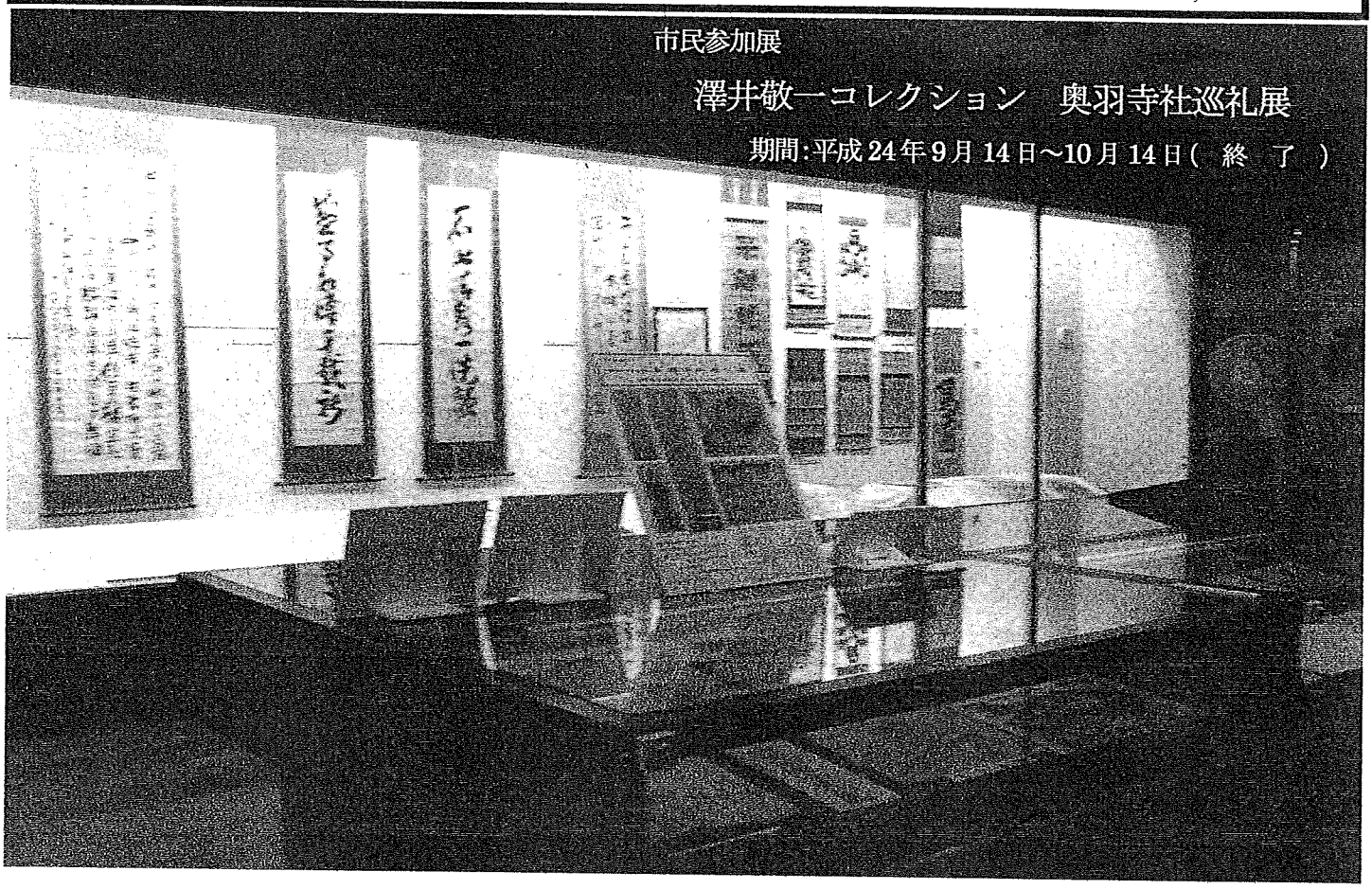
れき みん
となん歴民だより vol.32

Morioka tonan history and folklore museum

平成24年9月30日発行

発行 盛岡市都南歴史民俗資料館 盛岡市湯沢 1-1-38 Tel/Fax 019-638-7228



是非ご来館ください。お待ちしております。

— もくじ —

・当館指導員 安田隼人
「感通庵と安珍清姫伝説についての一考察」

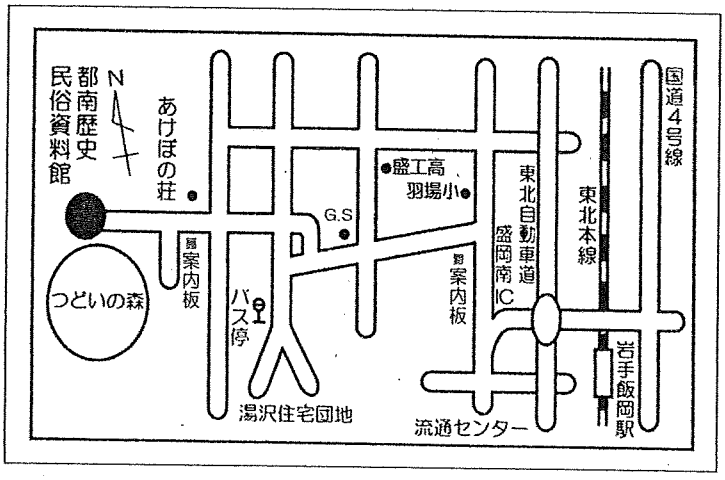
・遺跡の学び館記念館の紹介

・資料は語る㉜

・盛岡市所在
指定・登録文化財紹介㉜

・となんの昔ばなし㉜

MAP☆ACCESS



○利用案内

開館時間 午前9時から
午後4時まで

入館料 無 料

休館日 月曜日
(休日に当たるときは、
直近の平日)
年末年始

感通庵と安珍清姫伝説についての一考察

盛岡市都南歴史民俗資料館　指導員　安　田　隼　人

以前、『となん歴民だより』Vol.12、27で「安珍清姫」という民話を紹介した。そもそも、この「安珍清姫」は道成寺の安珍清姫伝説に由来している。道成寺は、和歌山県日高郡日高川町にある天台寺院で紀道成の創建とする寺である。この「道成寺縁起」にある女が蛇体となって男を追いかけ焼き殺すという話が、地歌「古道成寺」・浄瑠璃「日高川入相花王（いりあいざくら）」などや、その後日譚である長唄「京鹿子娘道成寺」のほか類曲が多くつくられている。今回は、その感通庵と「安珍清姫」について、感通庵があった場所や民話という口頭伝承について考察したい。

さて、「安珍清姫」『となんの民話』（都南村歴史民俗資料館、1988）に出てくる感通庵は、宝永3年（1703）に開山し享保20年（1735）に廃庵となっている。これは、民話という口頭伝承だけではなく、大巻秀詮「封内郷村誌」『南部叢書』第五冊（東洋書院、1982）140頁の西見前村の項に「感通庵盛岡大慈寺末庵」とあり、大慈寺の末寺であったことがわかっている。「安珍清姫」では、柿木（現盛岡市西見前12地割）に感通庵があったとされ、これとともに月山の宮があり、8月8日を祭日とし石碑も存在していると言われている。おそらく、この月山の宮は柿木にある月山神社であると思われる。「社祀調」『都南村誌』（都南村、1974）849頁では、月山神社の祭日は8月8日ではなく8月15日であり、筆者の聞き取りでも8月15日を祭日とし「御神酒上げ」と称した例祭を行っているとのことであった。この「御神酒上げ」には、月山神社周辺の地域住民が参加している。前述の「社祀調」では講中25家を数えている。こうした講による信仰の他にも月山神社は戦前まで柿木一帯の信仰の場であったらしく、第2次世界大戦等の出征祈願の際には地域住民の参拝が行われていた。また、柿木の地域住民は月山神社を「庵寺」といい、「詳しいことはよく分からないが、むかし、ここに寺があったようだ」とも話している。以上のことから月山の宮は月山神社のことであり、感通庵は大慈寺の末寺であったと同時に神宮寺でもあったことがわかる。感通庵の規模それ自体はさすがにわからないものの、これらをふまえると月山神社周辺が、かつて感通庵のあった場所であったことは間違いなさそうである。前述の通り安珍清姫伝説には浄瑠璃、歌舞伎、能楽等に演目がある。おそらくは、盛岡藩内においてもこれらの諸芸能が興行されることによって安珍清姫伝説が、地域の身近な寺院や地名に引きつけられ類話がつくられていったのだろう。盛岡藩は、藩主自ら能を嗜むほどに芸能が盛んであった。当館所蔵の『宝生流謡本』（吉田義昭寄託）、『観世流謡本』（藤村尊信寄贈）内に「道成寺」の演目がある。また、盛岡観世会『会員名簿』（川口荷札株式会社、1956）をみると、その会員は盛岡市内にとどまらず松尾鉱山（旧松尾町・現八幡平市）や紫波町日詰にまで及ぶほどであり、戦後に至っても能楽は盛んに行われていたようである。こうしたことからも、十分に旧都南村に住む人々にとって安珍清姫伝説に触れる機会があったはずである。

また、「盛岡中心のハイキングコース」『夕刊岩手日報』（岩手日報社、昭和10年6月16日付）に「見前に這入ると第一にこの部落から安珍清姫の安珍が出たといふことを耳にした現に安珍がゐた感通庵の遺址が俗に『柿の木』と云う舊家の左の畑地にあつて墓らしい石塊がころがつてゐる、講釈師が日高川の妖艶な戀物語を高座で辯ずる時安珍を南部高田生れといふが高田ではなくて見前が本當なさうだ、兎に角偉いものが飛び出したものだ」とある（盛岡市史蹟名勝係社会主事・上飯坂生が記者と同道）。やはり、講釈師や能楽といった興業によってこの類話が流布したといってよいだろう。なお、安珍の出身地として岩手県盛岡市柿木感通庵のほかに福島県白河市根田、宮城県白石市延命寺と様々ある。しかし、同話の原話ともいえる平安時代に編まれたという『大日本国法華験記』『今昔物語』には、安珍、清姫の名は出てこない。

安珍の名は鎌倉時代編纂の『元享釈書（げんこうしゃくしょ）』に鞍馬寺の僧として登場するのが初出であり、清姫の名は、江戸時代までなく元文4年（1739）『道成寺霊蹤記（どうじょうじれいようき）』序文や寛保2年（1742）初演の浄瑠璃『道成寺現在蛇鱗（どうじょうじげんざいうろこ）』にはじめてみえるようになるのである。このことから『となんの民話』にある「安珍清姫」は、感通庵の廃寺後かつ寛保2年以後に講釈師のような芸能者によって作られていったことがわかる、民話のなかでもおおよその製作年代が特定できる珍しい事例なのである。廃寺となった感通庵は、芸能者にとっても題材にしやすかったのだろし、そうすることで稼ぎやすくもなるだろう。アメリカの民俗学者リチャード・ドーソンが、近代の文学作品や雑誌記事から派生した口頭伝承を偽物の民俗＝フェイクロアとして批判したことは有名だが、近代以前からこのようなフェイクロアは存在しており、それが例えフェイクだったとしても、このように原話を改変し自己に引きつけた話にしていくことそれ自体がフォークロア（民俗）といえるのではないだろうか。そういう意味では、フェイクロアもフォークロアの一部なのであり、フェイクロアをフェイクとして断罪するのではなく、なぜフェイクしたかを考えるほうがフォークロアとして有意義といえるだろう。※本文に「部落」という差別用語が含まれるが、『岩手日報』原文のまま掲載していることをご了承願いたい。

盛岡市遺跡の学び館紹介

盛岡市遺跡の学び館は、平成16年6月1日に岩手県立美術館や先人記念館、子ども科学館が隣接する盛岡市中央公園地内に開館し、市内の発掘調査で得られた遺物やその成果を展示室、企画展示室、保管展示室などで展示しています。このほかに、研修室、図書室、体験学習室を設け、体験学習や講演会などを行い、市民の皆様にとって歴史を学ぶことができる場となっています。都南地区の遺跡出土資料もたくさん展示されています。

◆利用案内（※小学生未満、市内在住65歳以上の方、障がい者手帳をお持ちの方とその付き添いの方1名は無料です）

開館時間：午前9時00分～午後5時00分

（入館は午後4時30分まで）

入館料：一般200円（20名以上団体160円）

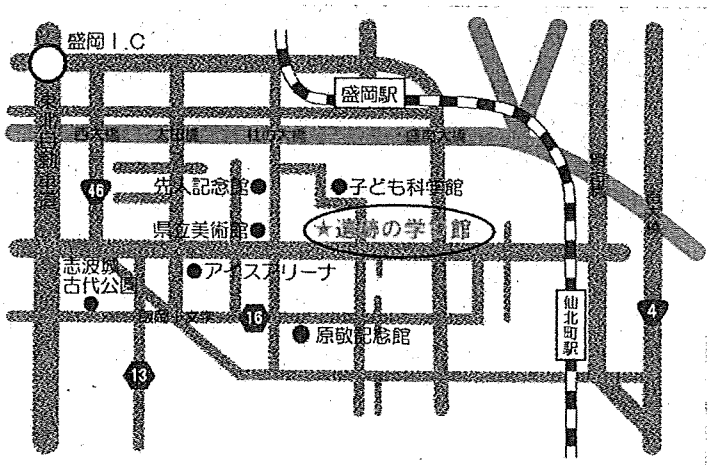
小中学生　100円（20名以上団体80円）

休館日：毎週月曜日（祝祭日にあたる場合は翌平日）

毎月最終火曜日　年末年始

お問い合わせ先

TEL 019-635-6600/FAX 019-635-6605

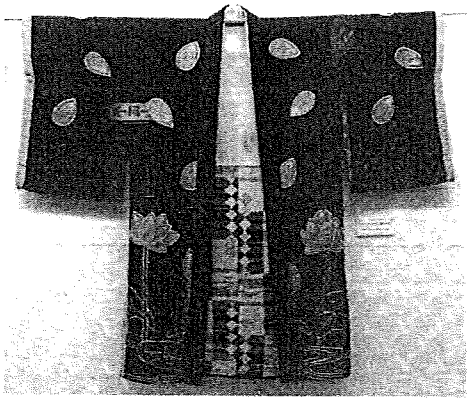


◆イベント情報

展示会	第30回埋蔵文化財調査資料展 盛岡を発掘する 盛岡を発掘する-平成24年度調査報告速報-	成25年2月8日（金）～5月19日（日）
講座等	平成24年度調査成果報告会	平成25年度3月3日（日）
体験学習	カゴを作ってみよう!	平成25年2月24（日）

※標記以外のお問い合せやご利用については遺跡の学び館（上記連絡先）までお願いします。

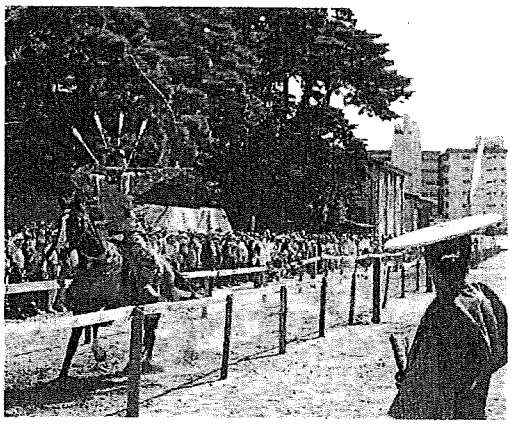
資料は語る㉜



【永井の大念仏剣舞衣裳】

鐘張り、ふくべ振り、太刀踊り、扇踊り、唐団扇踊り、常太鼓の踊子の内、鐘張り、ふくべ振りが着用する衣裳です。永井の大念仏剣舞は昭和55年（1980）に国指定重要無形民俗文化財になりました。永井の大念仏剣舞は、庭元の高畔（屋号）家に伝わるものです。高畔家の先祖である金治が南日詰（紫波町）から養嗣子に来る際に同家に伝えたとされています。永井の大念仏剣舞に限らず、念仏剣舞は「梅若伝説」に因を発しています。「梅若伝説」の発祥の地は東京都墨田区です。この伝説に因を発する行事は、神奈川県、東京都、埼玉県、茨城県、福島県、宮城県、岩手県に分布しています。これらの詳細については、企画展「都南の剣舞」（当館開催/10月19日～12月9日）で紹介しますので是非お越しください。

盛岡市所在指定・登録文化財紹介㉜



盛岡八幡宮流鏑馬神事

鎌倉時代初期に南部家によって伝えられたもので、建武2年（1335）から櫛引八幡宮（八戸市）で行われ、さらに天和元年（1681）には盛岡八幡宮の造営とともに例大祭の中心的神事として行われてきました。

流鏑馬は良馬に跨った射手が三本ずつの矢を三度放って命中率を競うもので、馬上清めの儀や馬入れの儀、本儀の各作法は特色ある法式で執り行われ、五穀豊穣・国家安泰・家内安全を祈願します。

参考・引用資料：盛岡市教育委員会『もりおかの文化財』、2008。

『天狗話』　となんの昔ばなし三十二

手代森の田の沢に与四郎ど（屋号）という家があります。これは現戸主のひいお爺さんが若い時分のお話しです。

家の近くの山で薪取りをしていたひいお爺さんの弟が夜になっても帰ってきません。心配になり、付近の山々をくまなく探しましたが、見つかりません。昔からよく話に聞いている神隠しにあったのだろうかと諦めきれずにいました。ところが、5ヶ月程たった頃、弟は突然どこからともなく姿を現しました。

弟は、やつれた様子もなく、何事もなかったような様子でした。家族はびっくりしましたが、大変喜びました。話を聞くところによると、弟は薪取りの最中に天狗にさらわれて、架橋の手伝いをさせられていたそうです。天狗は、十分にご飯も食べさてくれたし、少しも怖くなかったそうです。そうこうしているうちに架橋の仕事も終わりました。弟は家が恋しくなり、帰宅したい旨を天狗に話したところ、天狗は「お前は辛抱して稼いでくれた。礼をつかわそう」と言って、一巻の巻物とヤカンとゴマ石で作られた薬鉢をくれました。天狗は、さまざまな薬草や、薬の作り方を教えてくれました。

その後、その弟は近所の人達に薬を作ってあげたりして、大変感謝されたそうです。ただし、その製法は、火事で巻物が焼けてしまい分からなくなってしまいました。また、ヤカンは馬に踏みつけられて壊れてしまったそうです。現在残っているものは、ゴマ石で作られた薬鉢のみとのことです。

出典：『となんの民話』（都南歴史民俗資料館、一九八八）。